

2016.7.31.

(2020.7.15.加筆)

DVD『恒石重嗣元陸軍中佐の回想：「ウィリアムズの拒否事件」ほか』

名倉有一 (E-mail:nagura95@gmail.com)

1. 撮影日時：1996年3月30日午後

2. 場所：高知市・山内会館喫茶室

3. 撮影：名倉有一

4. 経緯

- ・私は余暇に池田徳眞氏の『日の丸アワー』関係者を探してお話を伺う中、恒石重嗣氏は東京都中央図書館で見つけたご著書『心理作戦の回想』でご住所が判明した。
- ・1988年7月に初めて東京赤坂でお目にかかって以来、手紙でいろいろご教示いただき、本ビデオの録画もご了承いただいたもの（当日いただいた名刺と、持参したご著書へのサイン：p.12）
- ・当日は上海から福岡空港経由高知空港へ入る予定が天候の関係で高松空港へ着陸し、そこからバスで高知へ向かった。
- ・恒石氏に電話で事情を説明し約束の時間の変更をお願いしたところご快諾いただいた。
- ・ビデオカメラが喫茶室の周囲の騒音を拾って、やや聴き苦しい場面がある。
- ・なお、恒石氏はこの撮影の半年後の1996年9月19日に亡くなられた。

5. 録画時間

シーン	時間
①	1:22:39

6. 概略：次ページ以下のとおり

7. 本ビデオの所在：①国立国会図書館、②オーテピア高知図書館、③善通寺市立図書館

概略：シーン①

時間	内容
0:00:00- 0:20	(名倉が持参した写真を見る)
0:45-	(ウィリアムズの拒否事件) ・(日の丸アワー放送開始時) 11月下旬から12月初めまで仏印へ急に行くようになった
01:23-	・小岩井少佐が、課長と相談したかも分からんが捕虜に命令した ・私の考えは違って、命令と強制ではこういう仕事はまずい
01:56-	・(それで) 仏印から帰ってすぐ12月10日だと思ったが(駿河台分室へ)行って、13名(の捕虜)を集めて私の考えを述べた (喫茶室内で席を移動) (耳が悪いのでゆっくり話すようにとの指示)
03:31-	(ご著書『心理作戦の回想』を取り出す)
03:57-	・捕虜たちと話し合いをして合意を得てこの仕事をやろうと思った ¹ ・捕虜たちに説明した趣旨は(同書) p.209.にある
05:40-	・賛否を問うたところ、3番目の人が協力できないと前へ出た ・これはショックだった ・そのまま言っても威厳がないと思い、腰に吊った軍刀を外して前に突っ立てて威儀を正して、厳かに4番以降を指名した
07:15-	・反対者は出なかったので解散し、捕虜たちは居住施設に帰った ・捕虜たちが二階から、中庭にいる反対したウィリアムズさんと自分たちを見ているのに気が付いたので、よく覚えていないが抜刀するようなジェスチャーをしたらしい
08:19-	・和歌山の浜本は、私が抜刀して斬殺しようとするのを留めてやめて

^{かれら}
1 「...なるべく彼等に自発的に行なわせ「自由アメリカ」【※】的性格をもたせ、日本側は表面に出ることなく陰で指導し、監督する立場をとるようにした」

[恒石重嗣. 心理作戦の回想：大東亜戦争秘録. 東宣出版, 1978, p.193]

※恒石氏が参考にしたのは以下の事例か.

「自由フランス(じゆうフランス、フランス語: France libre)は、第二次世界大戦中にドイツによるフランス占領に反対して成立した、連合国側の組織。亡命フランス人による独自の自由フランス軍(Forges Françaises Libres)を率いるとともに、フランス国内のレジスタンス活動(en:French Resistance)を支援した。[中略]1940年のドイツ軍の侵攻によるパリ陥落後の6月17日にイギリスのロンドンに亡命した前国防次官シャルル・ド・ゴール将軍は、6月18日にはイギリスの公共放送BBCを通じて歴史的な演説(en:Appeal of 18 June)を行い、国内外のフランス人に対独抵抗運動(レジスタンス)を呼びかけた」.

[“自由フランス”. ウィキペディア. <https://ja.wikipedia.org/wiki/自由フランス>, (参照2016-7-31)]

<p>09:20- 10:29- 12:20- 13:00-</p>	<p>もらったと言っている。緊迫した雰囲気にはなっただろうが、自分は二階の捕虜を意識して芝居じみたジェスチャーをしたのが誤り伝えられている</p> <ul style="list-style-type: none"> ・別室で腰掛けてウィリアムズさんと懇談²。通訳は牧秀司³ ・あの場面での反対はよほど信念がないとできない ・国家に反逆することは死んでもできないと明言するので断念 ・大森キャンプし戻して仕事の内容を知られたくないと思い、憲兵司令部へ電話で処置を漠然とお願いした ・憲兵司令部が大森収容所の所長らと話をし大井川⁴の方へやったと思う。その後のことは自分はタッチしていないし、行ったこともしらなかった
--	--

² ○「ついで私は彼を別室に入れて、温情をもって再度協力を要請した。しかし「私には妻子もあるがたとえ殺されても祖国に対する反逆行為はできない」というのが彼の一贯した態度であったので、惜しい人物と思いつながらも説得を諦めた」。

『『心理作戦の回想』 p.210]

○当時現場にいた浜本純一氏は否定している。「恒石氏の「別室に於て再度要請...」はなし」.[名倉宛書簡. 1988-8-17, p.8]

○なおウィリアムズ氏の結婚は戦後。“...we were married by my father in Munsley Church on 5th March 1946.” . [Charles F. Williams. 名倉宛書簡. 1991-8-2, p.12]

³ 駿河台分室企画部・牧秀司. 『『心理作戦の回想』 p.200]

⁴ 正しくは天竜川。“When I got to the camp the barrage on Tenryukawa had not been completed...” [Williams. 1991-4-6, p.10]

13:24-	(終戦後の追及) ⁵ <ul style="list-style-type: none"> ・捕虜たちは彼が殺されたと思い詰めていたし、(日本側)職員もそういう雰囲気を出したと思う ・米軍が進駐してCIC⁶が元の参謀本部へ行って永井という課長にウィリアムズのことを尋ねた
14:36-	<ul style="list-style-type: none"> ・この(日の丸アワーの)仕事をやった時は、その前の西大佐 ・西大佐はメキシコの駐在武官だった人で、東京放送は生硬という意見を持っていた ・それを改善するため、捕虜の中から3名のベテランを呼び、NHKの雇用員として一般の外人扱いをした ・その西大佐の時に、前線の兵隊だけでなくゼロ・アワーのように米国民にも呼びかけねばいけないと言い、私もかねてそう思っていた ・昭和20年7月から自分は四国防衛の五十五軍へ兵站参謀^{へいたん}で出たが、(事情を知らない永井)課長は困って陸軍省の人事局に話して陸軍省の兵務局へ私を転勤させ、GHQへの回答を担当させた ・自分が行った時には、ウィリアムズさんは無事という答は出ていた ・(英国政府から)勲章をもらった⁷というが、それは当然のこと。日本人でもよほど骨のあるものでないと、あの行動はとれない
19:44-	<ul style="list-style-type: none"> ・ウィリアムズさんは将校待遇だったから、やらせるとしても労役は軽いものしかできない
21:03-	(ウィリアムズ氏は、日本側が隠しマイクで自分が拒否することを知っていて、駿河台分室から連れ出したのも演技だと思っていた)
21:48-	<ul style="list-style-type: none"> ・仕組みられた訳ではなく、たまたまそうなったわけ
22:23-	<ul style="list-style-type: none"> ・隠しマイクはやらなかった
22:51-	(仮に仕組みられていると分かっているとしても、あの状況で拒否するのは難しかったのではないか)
24:12-	<ul style="list-style-type: none"> ・そうだ。自分も反対者はないと思っていた。楽観的に ・ことに米人は。NHKの海外放送を改善するため頼んだインスの例 ・捕虜というものに対する考え方、米人と英人で違い ・自分がしゃべる10日前に小岩井が命令していたから、諦めて仕方ないという気持ちでおるだろうと思っていた ・ただあくまで賛否は問うて、強制・命令ではなく、合意の上でやる

⁵ 『心理作戦の回想』 pp.305-314. 池田徳眞. 駿河台分室物語【資料編】. 私家版, 2015, pp.89-90, 付属 DVD No.2 C-2-c.へ収録.

⁶ 対諜報部隊 (counter intelligence corps) . 『i 英辞郎』

⁷ 池田徳眞. 日の丸アワー：対米謀略放送物語. 中央公論社, 1979, p.55.

	<p>という形式をとりたかった</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ところがやってみたらウィリアムズさんは堂々と前に出てきた。本当にびっくりした
24:56-	<p>(三步か一步か?)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前へ出ると命じた ・何歩だったかは自信がないが、前に出て反対の意思表示をした
25:55-	<p>(通訳は?)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先ほど話に出た牧ではない。宇野⁸という人もいた
26:33-	<p>(ウィリアムズさんがしている将校待遇⁹を自分から要求するのはいかなものかと感じるが?)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(国際)条約で、将校なら雑役的な労役から逃れることができる
29:24-	<ul style="list-style-type: none"> ・宣伝はいいとは書いてないが、日本人でも食糧は苦しい状況だったから、12万人余りを食べさすばかりで放っとくのは勿体ない、(准士官以上も)働かせよというところから、陸軍省と参謀本部の関係者が集まって規約的なものを作った¹⁰ ・学術、技術、戦史、放送のような宣伝業務は、強制はいけませんがやらせてよろしいということになった
31:07-	<p>(ウィリアムズ氏がマキン島で捕虜になった時のエピソード)</p>
32:44-	<p>(駿河台分室の中庭に整列した捕虜の人数は13人か14人か? 1人はブッシュではないか?)¹¹</p>
33:40-	<ul style="list-style-type: none"> ・53名の候補者の)中から1次で採用した者は13名だったと思う。あれは池田さんが担当して何度も大森へ通った
	<p>(以上でウィリアムズの拒否事件に関連した質問終了)</p>
34:25-	<ul style="list-style-type: none"> ・ウィリアムズさんのことに関心を持った動機は? <p>(イギリスでの研修時の経験から、と回答)</p>
36:41--	<ul style="list-style-type: none"> ・(タバコを出す)ウィリアムズさんのことはどこから? <p>(『日の丸アワー』と回答)</p>
37:25-	<ul style="list-style-type: none"> ・ウィリアムズさんを探すのに資料を集めるのは骨が折れただろう

⁸ 駿河台分室放送部・宇野一磨. 『心理作戦の回想』 p.200]

⁹ ○「...世界最小の土地を治めるガバナーかも知れないが、日本軍はその役名に対し敬意を表して少尉待遇を与えていたのである」. 『日の丸アワー』 p.69]

○名倉有一編. 横浜・山手250番館：1942年1月、マキン島から来た捕虜たちの記録. 私家版, 2014, p.142.

¹⁰ 「捕虜を放送などの宣伝業務につかしめるためには、一般に国際法規によるべきものであるが、将校、准士官に関しては先に述べたように [pp.167-168]、大本営と陸海軍省との間に特例が取り決められた」. 『心理作戦の回想』 pp.193-194]

¹¹ 正しくは14名. 『駿河台分室物語【資料編】』 p.283]

<p>37:44-</p> <p>37:58-</p> <p>38:11-</p>	<p>(日本は戦後捕虜に関する資料を焼いたので、過日恒石氏からご紹介いただいた白井(正辰)氏が厚生省の援護局に当たって下さったが、見つからなかった)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・駿河台の資料も全部焼いてしまった¹²。その時自分は四国にいたが ・米国の国立図書館¹³にはある ・昨年もTBSがワシントンの国立図書館へ行ったら、日本から行った(太平洋戦争中米国に向けて放送した)ポストマン¹⁴とか、東京ローズ¹⁵、ヒューマニティコール¹⁶とか全部とっている(残してある)らしい ・それを一つコピーして私に送ってくれた。日本にはないけど向うにはある ・宣伝ビラでも同じ。名古屋の長谷川¹⁷という人は少々持っているようだ ・亡くなった鎌倉的那須良輔¹⁸も持っていた。その中から一部だけ(『心理作戦の回想』へ)コピーして入れた
<p>40:07-</p> <p>40:47-</p> <p>41:07-</p>	<p>(対外放送の工夫)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宣伝のことだから幅はあるが、力をどこかへ集中しなければいけなかったが、なかなかそこまでできなかった ・無数の電波の(飛び交う)中に割り込んでいくのが難しい ・放送は後に残らないから、そこにいちばん苦勞するし、適材(の捕虜)¹⁹がいた ・(東京放送に人気があったのは)東京ローズが出たからというより、アドリブが気が利いて、相手の痛いところを突いてしかも面白くやる、そこに(米兵は)相当魅かれたようだ ・それと音楽²⁰。戦争中の音楽はやらずに戦前のものばかりやってそ

¹² 恒石氏の後任の一二三九兵衛少佐。[『日の丸アワー』 p.140]

¹³ 米国立公文書記録管理局(National Archives and Records Administration, NARA)のことか。

¹⁴ ポストマンコールズ。[『心理作戦の回想』 p.231]

¹⁵ ゼロ・アワー。[同書. p.176-179]

¹⁶ ヒューマニティコールズ。[同.p.231]

¹⁷ 長谷川中央。[同. p.201. 『駿河台分室物語【資料編】』 p.247]

¹⁸ 『心理作戦の回想』 p.201. 『駿河台分室物語【資料編】』 p.244.

¹⁹ 豪州陸軍カズンス少佐, 米陸軍インズ大尉, 米比軍レイズ中尉。[『心理作戦の回想』 p.168]

²⁰ 米陸軍のラジオを統轄していたテド・E・シャーダマン(Ted. E. Sherdeman)中佐の

41:40-	<p>れが懐かしいというか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それと功績があったと思うのは、米国内のローカル放送をキャッチできたこと²¹ ・大野さんという参謀本部第八課の嘱託の技師が、私の思いつきを（具体化してくれた） ・戦争が始まったが情報がほとんど入らない。入るのは第三国、枢軸関係、中立国から外務省へ入って来る公電しかない。相手の内容を全然知らずにやっても宙に浮いていかん、アメリカはローカルで嘘を言えない国だからそれが聴けたらと思った ・大野さんに相談すると、真面目な人で本社へ帰って相談してみますということになった。戦争が始まった（1941年）12月 ・同社は高知出身の深田という人を中心にベテランが取り組んで翌年2月ころに機械が出来上がった²² ・15～6局のローカル放送が毎日入って来るので、200人の二世を動員してレシーバーで聴きながら速記していく訳だ ・細かいが出征している兵隊さんにとって関心のある郷里や家族のことなので、これが東京ローズ以上に効果があったと思っている ・それと（東京ローズの）セクシーな声がちょうどつながって総合した効果があった ・それと国内向けの大本営発表と違い、海外放送はうそばかり言っても通らない。その日の米国のニュースをその日に流すと、当時新聞記者が本国と前線を往来してるから（兵隊が）聞いて本当だと分かり、東京放送に対する信頼性が生まれる
45:47-	<p>(各国の海外放送)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・BBC はいちばん信頼が置けた。あまりデタラメを言わない ・いちばんいかんのは中国 ・米国もかなり太い（ずうずうしい）ことを言っていた。インド、豪州も同じ

証言。「...私の仕事は米軍将兵をホットジャズと宣伝の献立表の東京放送から引き離して、われわれの番組を聞かせることであった。しかしながら船舶の余積〔席〕は少なくて良いレコードを輸送して、これを利用することは一九四四年末期までできなかった」。

〔同書 pp.180-181〕

²¹ 『心理作戦の回想』 pp.259-262.

²² ○1943年10月ころ外務省ラジオ室でも同様の実験に成功した。

〔池田徳眞. プロパガンダ戦史. 中央公論社, 1981, pp.28-37〕

○但し傍受内容は「...外務省内部にだけ配布した」。〔同書. p.35〕

<p>47:06-</p>	<p>(日本の宣伝体制)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・貧弱だった。ドイツは宣伝省があつて宣伝大臣がいて大々的にやっていた ・日本も情報局が出来て 550 人くらいいたけれど^{よりあいじよたい}寄合所帯で出向者の人事は各本省が握っていてひも付き、これではなかなかまとまてはいかない。形はできていたけど弱かっただろう
<p>48:00-</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・陸海軍も報道部がいて、陸軍では国内向け大本営発表とか新聞指導とかは平時からしていた ・ところが海外向け報道とか宣伝はほとんどやっていない ・(その理由は) ひとつには情報が入らない ・あの時分の情報は在外公館から全部外務省に入って、同じものが参謀本部第二部には来るが報道部にはいかないから世界の情報はほとんど聞こえず、これに海外放送は無理
<p>49:01-</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・参謀本部第八課は企画が建前。五、六、七課は立場が違えば見方も違うからそれらを統合して総合的な情勢判断するのが役目。それと謀略、宣伝、暗号 ・報道部は昔は新聞部と言っていた。報道部という名前にしたところで国内向けばかり。八課は企画だから本来実行面はやるようになっていない ・機構上は海外放送は報道部だから、自分の身分は参謀部第八課の部員と報道部を兼ねていた²³。変則的 ・海軍は報道部の中に国内向けも外向けも一緒になっていて、八課みたいなところはなかったようだ ・陸軍海軍ともうるさい「小姑」^{こじゅうと}がいて、報道部が発表するといつても勝手にはできない。案文を書く^{はんこ}と判子をもらわなければならない。陸軍では軍務局の軍事課、軍務課、第八課、(作戦が) 第二課から印鑑をもらった結果大本営発表の発表文が決まる²⁴ ・そして海軍とも関係ある戦況であれば海軍とも連絡しなければならない

²³ 「さて [1941 年 11 月の] 着任早々私に課せられた宣伝業務は、差し当たり大本営発表、電波による対外宣伝および在外武官への連絡などで、なканずく取り急ぎ処理せねばならぬことは、今次大戦における宣伝計画の立案と南方作戦の企画^{ひとく}秘匿の宣伝を行なうことであつた」。『心理作戦の回想』 p.7]

²⁴ 1945 年 7 月ころ恒石少佐から捕虜放送を引き継いだ一二三少佐の話「...多い時は印が十幾つにもなったり、訂正になることも多く、言えない苦勞があつたようである」。『駿河台分室物語【資料編】』 p.111]

<p>52:00-</p>	<p>(「大本営発表」の実情)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大本営はうそを言う、という言われ方を今でもされるが、必ずしもうそを言う積りもあまりなかったが、損害をそのまま赤裸々に言うのも利敵行為になるし、国民も受取り方によってはかえって意気消沈してしまう。だから 10 の損害があっても 5 とか 6 にする ・ミッドウェー海戦 (の損害) も、最初は陸軍に対しても作戦 (課) 以外には知らされていない
<p>52:45-</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・マッカーサーのレイテ上陸前、(米) 機動部隊が台湾や内地、フィリピンあたりの航空勢力を猛烈に叩いた ・(日本海軍は) フィリピンで決戦をするということで、夜間爆撃専門の虎の子の部隊を温存していたが、あまり (米軍機動部隊に) 叩かれるのでたまりかねて出 (撃し) て行った ・夜間訓練を受けていたから、空母を目標に活発にやっただろう ・ただ夜だから (敵の) 大型艦が沈没した炎上したといっても空母であるのか大型の輸送船であるのか、空母でも制式空母なのか商船を改造した軽空母であるのかその区別がなかなかつきにくい ・おまけに 50 機とか 100 機とか出て行くと戦果が重複する ・そうすると 10 の戦艦 (に対する戦果) があっても 20 になる ・そして (戦果の) 内容が、油を運ぶ油送船もあるし、それから人間 (兵士) の乗っている大型輸送船もあるし、制式空母 (正規空母) もあるし商船を改造した軽空母もある ・それが分からずにハルゼーの機動部隊の制式空母を轟沈した大破した戦果を並べて前線から海軍の軍令部に報告が来る ・それをまとめて海軍の報道部で、文句は忘れたが、空母 11 隻を轟沈撃沈したと。そうなる と敵の (艦隊) 編成からして大多数の空母が無くなったことになる²⁵

²⁵ 「もしこれが事実とすれば、世界海戦史上最大の戦果で、アメリカが開戦以来進めて来た空母大量建造は、基地空軍の攻撃の前に一度で壊滅したことになる。「東京ローズ」は「ハルゼーを生捕りにして収容するために、モンキーハウスに特別な檻を作りました」と放送した。これを聞いたハルゼーは大本営のいつもの誇大発表と思ったが、あまりしつこく繰り返すので、日本人が本気で勝ったと思っているのではないかと疑いはじめた」。[大岡昇平. レイテ戦記 (上). 中央公論社, 1974, p.57]

55:32-	<ul style="list-style-type: none"> ・疑問を感じなければいけないけれど、それがなかなか難しい。前線の命がけで戦^{いくさ}をする部隊からの報告²⁶を、軍令部とか参謀部などが机の上で空母 11 隻は多すぎるから 5 隻くらいにしておこうとはなかなかできない
56:00-	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の失敗。航空総軍の司令部から来る B29 撃墜撃破の戦果報告を、修繕できるから発表は撃墜だけにしましょうと企画の立場で第二部長に意見具申 ・その結果部長から報道部長へ指示したところ航空総軍から文句 ・帰途不時着する機から、救助の駆逐艦へ暗号化する余裕がなく生で流す無線を傍受するとかなり被害が出ていることが分かった ・それが第一回の発表の直後だったので、二回目からは撃墜とともに大破も発表するようにした
59:35-	<ul style="list-style-type: none"> ・レイテの時は「空母 11 隻の大戦果」ためにハルゼー（の艦隊）は壊滅していると判断し、従来考えていたルソン島決戦を敵が上陸しているレイテ決戦に切り替えた ・ところがこれが全然間違っていた ・軍令部が気が付いて次長が参謀本部へあれは過大評価だったと挨拶に来たが、天皇陛下のお褒^ほめの勅語が出た後だから訂正も出来なかった ・これが（大本営発表の）大ウソのトップだが、ウソを言うつもりはないが実情は結果的にそうなった

²⁶ 日米の前線部隊の戦果誇張について、前掲『レイテ戦記（上）』に次の記述がある。

○【日本側】「...一本も命中しなかった。[中略]しかし水雷戦隊司令の罪は攻撃に失敗したことより、[時刻]一〇三〇に艦列に復帰した後、その戦果を「エンタープライズ級航空母艦一隻撃沈、一隻大破（沈没殆ど確実）、駆逐艦三隻撃沈」と誇張したことだったかも知れない。戦果の誇張は海戦に付きものであるが、この誇張はやや悪質である。こういう部下を持った栗田長官はまったく楽ではなかった」。

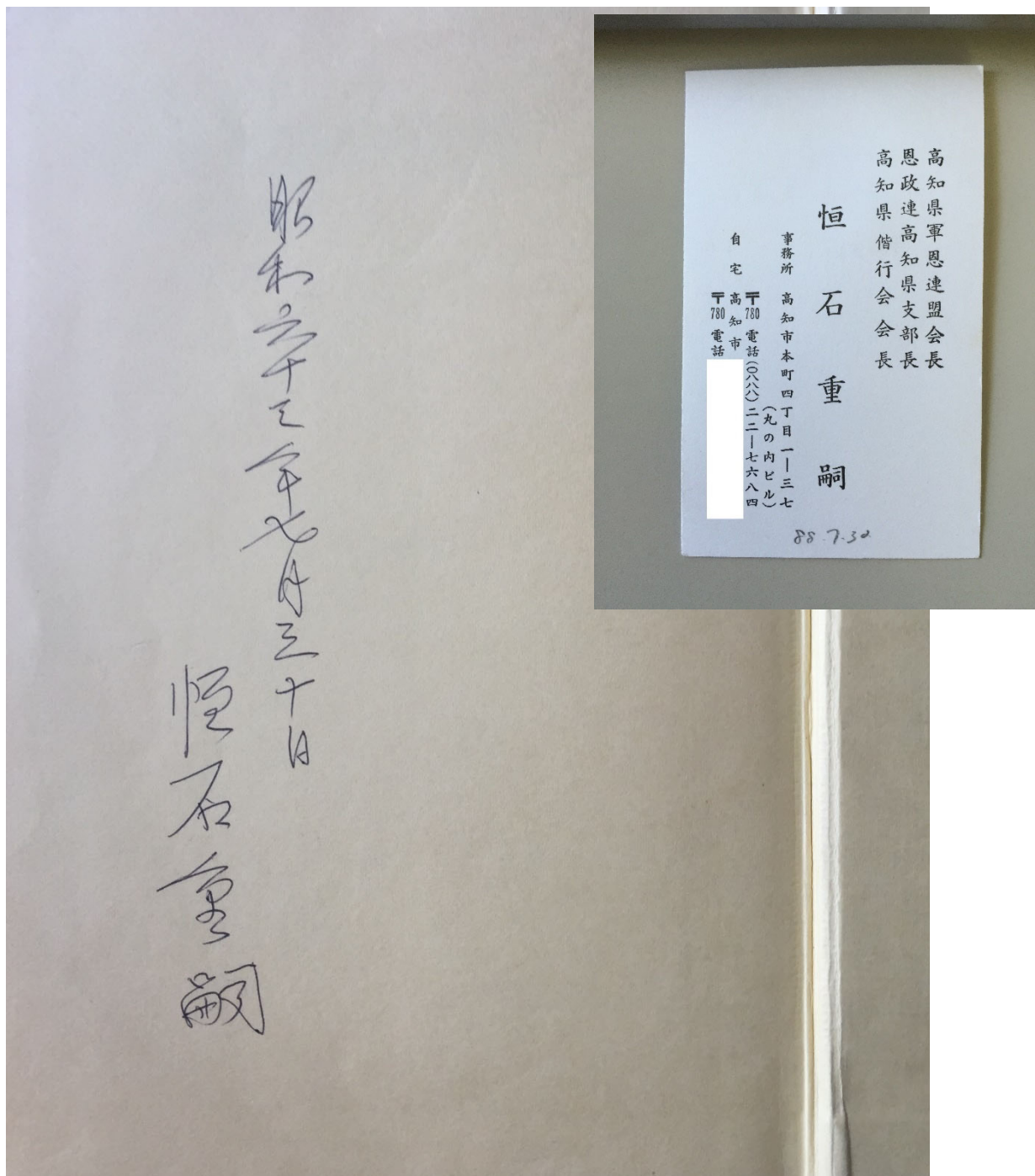
[p.228]

○【米国側】「彼 [ハルゼー] は栗田艦隊には壊滅的打撃を与えたから、もはやレイテ湾に突入することは出来ない、かりにそれを試みたとしても、キンケードの第七艦隊にとって重大な脅威ではない、と判断したのであるが、これは誤っていた。[中略]一五三〇回頭した時、栗田艦隊はまだ戦艦四、重巡六、軽巡二、駆逐艦一一から成る強力な艦隊であった。アメリカのパイロットがどんな報告をしたか不明であるが、どうやら日本のパイロットと同じく、よほど戦果の誇張をしていたらしいのである」。 [p.196]

1:02:00-	(日米の差) <ul style="list-style-type: none"> ・自軍の損害の発表で、日本は米国より少なかったとは言える
03:07-	<ul style="list-style-type: none"> ・これは「持てる国」と「持たざる国」の違い ・戦争は錯誤<small>さくご</small>の重なり。間違いを多くした方が敗ける。間違いは必ずある ・それから造成能力というか、スピードが違う ・ガダルカナルの飛行場建設で日本はスコップ、米国は鉄板を敷くだけ ・(参謀本部内の) 情報関係者はガダルカナル上陸は米国最強の海兵隊だから本気だという見方をしていたが、作戦の方は威力偵察程度で早く攻撃しないといなくなると甘い判断をしていた
07:00-	<ul style="list-style-type: none"> ・夜襲というが、日本と米国では「夜」の観念が違う。夜じゃない、昼よりも明るいくらい照明をする。夜襲が成り立たない
07:20-	<ul style="list-style-type: none"> ・戦後(裁判の) 証人で米国へ行ってそれがよく分かった。ニューヨークのブロードウェイ、宿泊したハーモニー・ホテル ・米国はレーダーを逸<small>いち</small>早く開発したから、潜水艦で行っても待ち伏せされる ・戦争は技術が一步遅れたらだめ
09:44-	(最近の日本) <ul style="list-style-type: none"> ・最近の中国北朝鮮等、日本軍より装備がいいところばかりだろう。自衛隊がバタバタやったところで大和魂では戦<small>いくさ</small>にならん ・中国の軍備が2桁<small>けた</small>の伸び、この間の台湾の問題²⁷、対中姿勢
11:42- -17:15	<ul style="list-style-type: none"> ・靖国神社の問題 ・自分の義務を尽くしてルールを守る。それが民主主義の基本
1:17:16-22:39	(映像なし)

²⁷ 「1995年-1996年台湾海峡危機又は1996年台湾危機とも呼ばれる第三次台湾海峡危機は、1995年7月21日から1996年3月23日まで台湾海峡を含む中華民国周辺海域で中華人民共和国が行った一連のミサイル試験の影響であった。1995年半ばから後半にかけて発射された最初のミサイルは、一つの中国から中華人民共和国外交政策を引き離すものと見られていた李登輝の下で中華民国政府に対する強力な信号を送ろうとしたものと見られている。第二波のミサイルは、1996年初めに発射され、1996年中華民国総統選挙への準備段階の台湾総統選挙に対する脅迫の意図があると見られた。[中略] アメリカ合衆国政府はベトナム戦争以来の最大級の軍事力を行使して反応した。クリントン大統領は1996年3月にこの地域に向けて艦船の増強を命じた。ニミッツを中心とした二つの航空母艦群(英語版)や第7航空母艦群(英語版)、インディペンデンスを中心にした第5航空母艦群(英語版)が台湾海峡に入ったと公式発表された。」. [“第三次台湾海峡危機”. ウィキペディア. <https://ja.wikipedia.org/wiki/第三次台湾海峡危機>, (参照2016-7-31). 脚注省略]

以上



恒石重嗣氏の名刺コピー（右上）と『心理作戦の回想』へのサイン